お手伝いクエスト
01数字の大小が分からない

20250808

エリー

目次

本文 1

本文

　思い出いっぱいの村に、里帰り出産のため、帰ってきた。

　わたしが育った村には、ちょっと変わった習慣がある。
　大人が掲示板に依頼を書くと、子どもが依頼を受けることができる仕組みで、「お手伝いクエスト」と呼ばれている。

　依頼内容と期限と報酬、違反事項などが書かれた契約書にサインして、おこづかいを稼ぐ。
　6 歳までは家の仕事しか手伝えない。7 歳から 12 歳まで村の仕事を手伝える。

　当時 6 歳のわたしは、母がホウキではいたあと、雑巾で水拭きするお手伝いを 1 日 10 円で、1 週間単位の契約をしていた。

　金曜日に 70 円を受けとると、長男の弦にいに付き添い料として 30 円払って、代わりに計算してもらう。

　数字は読めるが、大小が分からず、計算できない。
　当時のわたしは、弦にいにぼったくられていることにも気づかず、いいカモだった。

　小学校に上がったら計算を習うのだから、今は知らなくてよいと思ったのだ。

　ところが、悲劇は唐突に訪れる。

　40 円持って弦にいと駄菓子屋にいくと、見たこともないピカピカの指輪が 1 つだけ売られていた。

「これがほしい。これにする！」

　わたしが飛びつこうとすると、弦にいは服をつかんで止めた。

「鈴は 40 円しか持ってない。その指輪は 50 円」

　わたしは首をかしげる。

「買えるの？　買えないの？」

　あきれ顔で弦にいが答える。

「買えない。10 円足りない」

　貸してと言う前に、兄は 3 つ駄菓子を買って 30 円払い終わっていた。

「来週、買えばいいさ」

　食べながら歩く兄の後ろを、トボトボとついていく。

　家に帰ると母に 10 円前借りを頼んだ。

「ダメ。前借りは認めない」
「じゃあ、明日だけ 1 日分先は？」

　母は首を横に振る。

「契約書を作り直さないといけないからダメ。来週まで待ちなさい」

　しょんぼりしていると次男の律にいが帰ってきた。
　丸坊主の野球少年だ。
　ポケットを探りながら、反対の手で手招きする。
　近づくと飴玉をわたしの手に握らせた。

「一つだけだから内緒な」

　わたしの悲しみには気づかないが、優しいところのある兄なのだ。
　見つからないようにこっそり口に入れると涙がこぼれそうになった。
　この飴は 10 円で買える。
　わたしでも 1 が一番小さいことは分かる。
　飴ではなく 10 円のままもらえたら、今日指輪が買えたのに！

　翌日から心を無にして床の水拭きをした。そしてとうとう 70 円を手にした。

　弦にいに付き添いをたのまず、走って駄菓子屋に行くと、指輪はなくなっていた。

「ない！　指輪がない」
「惜しかったね。１０分前に売れたよ」

　走るのが早かったら間に合ったのに！
　どうしてわたしはバカでどんくさいんだろう？
　だから姫さまみたいな指輪も買えなかったの？

　わたしは、おいおいと声を上げながら、泣いて家まで帰った。

「どうしたの？」

　母がかけより抱き寄せてくれた。

「指輪、もうない。買えなかった」

　黙って頭を撫でてくれた母の匂いを今でも覚えている。

「わたし、数字の大小、覚えたい」

　泣き止んだわたしから自分でも意外な言葉が出た。

「教えてもいいよ」

　パァっとわたしの顔が輝く。

「床の水拭き１ヶ月無料でどう？」

　優しく抱き締めてくれたのに、金を取るの？

「つらい。知らないってつらい」

　わたしは母が用意した契約書にサインした。

お手伝いクエスト01数字の大小が分からない20250808

著　者　　ELYE

制　作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社